「不便益」ということ

学校研究のまとめに寄せて

2019．02．26
No.53
校長　渡邉　幸二

本校の学校研究のテーマは「学び合い　高め合う子どもの育成」で、サブタイトルは「1+1を3にも4にもするための授業改善」である。サブタイトルは、1学期始業式の校長講話がそのまま使われているようで気恥ずかしいのだが、今思うと何ともぴったりなような気もする（でも、必要なら来年度変えてもらって構わないが･･･）。これからの学びのめざす方向性である**「主体的･対話的で深い学び」**に直結するような良いサブタイトルだと思う。

さて、その「学び合い、高め合う」授業スタイルのために、現在キーワードとなっているのが**「きく」**である。子どもたちの**「わからない」**を大切にして、**「聞く」「訊く」「聴く」営み**を重視する授業であろう。私は、このキーワードが共有されてから、学校研究の質が一気に高まったと感じているし、実際に大きく動き出しているとも思っている。特に、山形大学准教授の**森田智幸先生**が指導されている県内各地の学校に出張研修をさせていただいたことから、一気に研究主任のプランが浸透し、授業スタイルも変わってきたように思う。

私は、この「わからない」「困る」「立ち止まる」、だから「きく」という流れが、「主体的･対話的で深い学び」にとってとても重要だと感じている。

これまでの子どもたちは、いつも「正解」ばかり求めていて、意見は出すが、相手の話を聞いてさらに深い理解に至ることも少なかったし、何とか「わかろう」として結局動けなくなってしまっていたり、納得できないまま知識だけを詰め込んだりしていたように思う。この1年間学んでみて、「正解」よりも「わからなさ」を共有して（分かち合って）、その解決に協働的に向かう方が、どれだけ**「課題解決」の姿を具現化**したものか。また「主体的･対話的で深い学び」となっていることか。

話は変わるが、工学博士の**川上浩司（ひろし）氏**は**「不便益」**という考えを提唱している。著書はまだ読んでいないので詳しくは言えないが、たとえば、介護施設では身体能力を低下させないために、あえて段差を設けていることや、偽りの漢字を時々交ぜて、使う人が漢字を忘れないようにするワープロなどがそれにあたる。便利さを減らして、使っている人を成長させていく取り組みのようだ。

さて、ふり返って教育や授業づくりを考えたとき、我々は24時間いつでも開いていて、何でも品物が揃っているコンビニをつくってきたのではないかと思う。**みんなが便利と感じる、一見みんなに優しいものづくり**であるが、**生活者は便利を享受するあまり、**

考えること、工夫することをしなくなってしまう自分になってはいないだろうか。授業づくりで言えば、一見、見栄え（結果）は良いが、あまりにも教師が仕切り過ぎて子どもたちが受身になったり、あるいは子どもの思考を妨げてしまうことになったり･･･わかる･できるようにはなったが、**子どもは考えることを止め、教師の答えを待ったり教えてもらうことを当たり前に思う**ような、そんなシステムとしての授業づくりである。

それよりも、みんながちょっと不便、つまり立ち止まってしまうような、困ってしまうような問題を提供することで子どもたちの成長を促すシステム･･･悩み、苦しみ、困ることも失敗することも多いが、その**難しさやわからなさを共有し、立ち向かおうとする子どもを育てていくことが肝心**なのではないだろうか。そういう子ども、そんな人として育たなければ、この先の見えない未来を力強く生き抜いていけるということは決してないと思うが、みなさんはどう感じているだろうか。

来年度、森田先生からのご指導を受けられることを本当にありがたく思います。このチャンスをしっかりと自らがつかんで、我々もジャンプして行きましょう。